

ロンドンでアフリカを考える

—ロンドン大学東洋アフリカ研究学院での経験から—

Thinking of Africa in London:

From My Experience at SOAS University of London

ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) 修士課程卒 中間 愛美

NAKAMA Megumi

(SOAS, University of London, MSc Violence, Conflict and Development)

キーワード：イギリス、アフリカ

はじめに

緒方貞子氏に憧れを抱いたのは、私が小学生の時。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件を引き金に、アフガニスタン紛争やイラク戦争が勃発していた頃だった。国連難民高等弁務官やアフガニスタン支援政府特別代表として活動されていた緒方氏の姿をテレビで見て、「こんな風に、一瞬にして壊されてしまった国や人々の生活の再建に役立ちたい」と思ったのが、大学入学以来、開発学を学んできた私の原体験となっているように思う。

2014年3月に学士号を取得した私は、緒方氏、アマルティア・セン氏らが提唱した「人間の安全保障」というコンセプトを理念に掲げる東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラムに進学。半年後には休学し、2014年10月から2015年9月にかけて、ロンドン大学東洋アフリカ学院（以下、SOAS）で学び、修士号を取得した。学位は「暴力、紛争と開発」（MSc in Violence, Conflict and Development, 以下、VCD）。ロンドンの中心にありながらエキゾチックな雰囲気漂う大学で、何を学び、何を得たのか、本レポートに記してみたい。

海外大学院への進学、そしてSOASという選択

なぜ海外大学院への進学を選択したのか？いつ頃から海外大学院への進学を意識していたのか？こうした質問を度々受けるが、正直なところ、明確な答えは持っていない。

というのも、大学院を選ぶ際に、国内大学院か海外大学院かという線引きはなく、どの大学ならア

フリカの国づくりに一番近づけるのかということばかり考えていたからである。また、幸いにも学部生の頃から交換留学や海外大学院への進学という選択肢が、極めて身近にある環境にいたることができたので、海外大学院への進学はごく自然に選択肢のひとつとなっていた。その結果、東京大学大学院と SOAS の修士課程に同時に進学し、3年間で2つの修士を取得する、という少し珍しい進路を取ることになった。

すなわち、国内大学院なのか海外大学院なのかという選択よりも、どの大学院に進学するかという選択が重要だったわけだが、進学先の選択方法は大きく二つに分けられていた。一つ目に、研究対象としている国・地域にある大学を選択する方法。もう一つが、研究対象としている国・地域に関する研究が盛んな大学を選択する方法だ。

私の研究対象は西アフリカに位置するリベリア共和国（以下、リベリア）である。リベリアでは2003年まで内戦が続いており、現大統領のエレン・ジョンソン・サーリーフ氏は、内戦終結への貢献でノーベル平和賞を受賞した人物でもある。そんなリベリアの教育水準は非常に低く、リベリア最大の国立大学であるリベリア大学では、2013年に行われた入学試験の受験者25,000人全員が不合格となり、「国家の緊急事態」声明が出されたほどだ。さらに、2014年から2015年にかけて、リベリアを含む西アフリカ諸国でエボラ出血熱が流行し、フィールドワークさえできない状況だった。

そこで、歴史的にも地理的にもアフリカとの結びつきが強いイギリスで、アジア・アフリカの地域研究を専門としている大学院である SOAS に注目し、入学を目指すことに決めた。SOAS では開発学に限らず、文学から経営学まで様々な学問がアジア・アフリカの地域研究の切り口から行われている。たとえば、図書館のフロアも地域ごとに分けられており、アフリカのフロアに行けば、アフリカの歴史、文学、経済など、アフリカに関するあらゆるテーマの書籍を閲覧できるという卓越した研究資料の環境が整備されている。このように、自らの研究の対象地域と関心のあるトピック（私の場合は、開発や平和構築）との交点を明確にして学ぶことができる SOAS は、私にとって非常に魅力的な大学であった。

SOAS での学びとサステイナブルな日常

まず、SOAS の概要を紹介したい。キャンパスはロンドンの中心部に位置し、イギリス国内では唯一の地域研究に特化した研究機関である。そうした特徴から、100カ国以上からの留学生が在籍している。私が所属していた VCD には約70人の学生がいたが、その約半数が留学生であった。また、途上国の開発や平和構築の現場での実践経験がある学生も半数程度いた。

そんな VCD で受講した授業は、開発の政治経済学や、暴力・紛争・開発の政治経済学、援助と開発、国際保健と開発である。前者2つが VCD の必修授業なのだが、そのカリキュラムの中心となっているのが政治経済学である。いかに現代のメインストリームである資本主義的な政治経済が、途上国の発

展や平和構築を妨げているのかを批判的に考えさせられる内容構成だ。初回授業の課題図書として、マルクス著『資本論』とマルクス、エンゲルス共著『共産党宣言』の2冊が挙げられており、いきなり SOAS らしさに圧倒されてしまったのを覚えている。

授業は基本的に1時間の大教室での講義と1時間の少人数でのディスカッションで構成される。援助国である先進国出身の学生、被援助国であるアジア・アフリカ・ラテンアメリカ出身の学生、そして開発援助の在り方に新たな問題をもたらしつつある新興国出身の学生が、それぞれの立場から議論することができる環境は、非常に刺激かつ臨場感あふれるものであった。また、暴力・紛争・開発の政治経済学の授業では、1年間の集大成として、約1ヶ月かけてグループでプレゼンテーションの準備を行った。その時のトピックは、「中央アフリカ共和国における国家の崩壊と国際社会の介入」であった。他にも、「アラブの春に見る公共スペースと暴力」、「ダーク・ツーリズム」、「紛争とエボラ出血熱」など、様々な現実的なトピックをもとにプレゼンテーションが行われた。どれも現代の国際情勢に対して批判的に考え直させられるものばかりで、1年間授業を受け、論文を読み、議論し合った結果、社会に対する自分自身の見方が明らかに変わったことを実感した。

また、授業のみならず、SOAS での日常生活にも研究テーマとの接点が自然と溢れていた。キャンパス内では、週に一度フェアトレードのお店が出店していたり、アフリカン・フードが振る舞われたり、外ではオーガニック・マーケットが開かれたりしていた。なかでも SOAS 特有なのは、校門の前で毎日昼食が無料で配られていることだ。これはスーパーマーケット等の廃棄食材を使って運営されているらしいのだが、お昼になるとタッパーを持った学生が長蛇の列を作っている光景は SOAS 名物だ。私も、何度もその恩恵にあずかった。

そんな資本主義とは異なる、もう一つの道を行く SOAS のサステイナブルでパーマナントな空気が、私にはとても心地よかった。休日も、クラスメイトとフラワーマーケットに出かけ、カフェでテスト勉強をする、そんなライフスタイルを満喫していた。

「途上国」が「ロンドン」で「日本人」をつなぐ

なぜ日本人がロンドンでアフリカのことを学んでいるのか？一部の人たちの目には、たとえ彼らが日本人であってもイギリス人であってもアフリカ諸国の人たちであっても、それは不思議に映るらしい。しかし、私のようにロンドンやイギリス各地で途上国について勉強している日本人学生は実は少なくない。そこで最後に、開発学・途上国というキーワードの下に集まった日本人学生のネットワークについて紹介したい。

私は SOAS 在学中、英国開発学勉強会（以下、IDDP）の運営スタッフとして活動していた。IDDP は途上国に関わる問題に関心を持つ学生が自主的に運営する団体で、月に1度、実務者や実務経験のある方を呼び、講演会を行っている。この団体で、私は毎月の講演会の企画を担当しており、講演会に

は毎回 40~50 人の学生がイギリス各地から参加していた。JICA 英国首席駐在員に始まり、国連平和維持活動(PKO)に従事した経験のある方や、アフリカで文化人類学のフィールドワークをしている方、NGO で働いている方など、幅広い分野で活動されている方々にご協力いただいていた。

この活動を通じて培ったネットワークは、留学中に大きな支えになっただけでなく、日本に帰国してからも続いている。その中には、一旦、日本に帰国して就職した人もいれば、途上国で活動している人も、ニューヨークの国連で働いている人もいる。こうした学外でのつながりは、留學生活全般を通じて、とても多くのものを与えてくれた。

おわりに

SOAS での修士課程を終えて日本に帰国してから、すでに1年以上が経った。そして、学生から社会人になり、社会に対する自分自身の立ち位置も多少なりとも変化した。学問を通じて国際社会やアフリカ社会に関わっていくのではなく、ビジネスを通じてそれらに関わっていきたいという思いから、いわゆる「社会に出る」選択をした。それにも関わらず、ふとした瞬間に、国際社会やアフリカ社会との距離が今まで以上に遠くなってしまったような感覚に陥ることもある。そんな時、SOAS で学んだこと、得たものは、自身の中に深く根付いているようで、根本的で長期的な指針となって支えてくれるのである。